

介護力向上に取り組んで！



8人に一つのトイレでも
オムツ外しは取り組める



当園の紹介



昭和59年4月開設 今年で33年目

定員：入居者70名
ショートステイ利用者10名

理念：「利用者・家族・職員誰もが安心して生活できる場所であること」
「自分の家族・自分が入居してもいいなと思えるケアを創ること」

問題点(トイレの数と動線の長さ)

- * 利用者数に対して、トイレの数が絶対的に足りない！
- * 主な生活スペース(当園の場合は食堂)からの動線の長さ！



問題点(トイレの数と動線の長さ)



問題への対応策

排便コントロールに取り組む

- ・排便間隔を調べる
- ・下剤の使用状況
- ・水分・活動量の増加



業務改善を行う

- ・出勤職員の役割分担を明確化する
- ・勤務体制(休憩時間等)の見直しをする

水分の提供

1, 500ml/日以上提供

目的-細胞を活性化させ、身体と意識の向上をさせる



運動(歩行)

生活上での移動は出来るだけ歩く事とする

目的-身体と意識の両面を活性化させ、歩いてADLの向上に繋げる。



結果・評価

ほぼ全員の利用者が1日1回はトイレに座る事ができた

排便間隔を日中にする事、排泄時間を定め、対応職員を明確化し、職員同士が声を掛け合いトイレ誘導を行う事でトイレに座ってもらう事ができました。

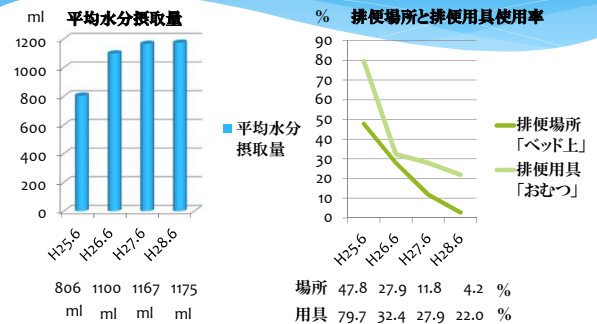
* 利用者の体に変化が見られてきた

水分提供や歩行が順調に進んできた方の中には、便失禁が減ってきたり、下剤を使用しなくても自然排便が出るようになってきました。

* 職員にも意欲が生まれ始めてきた

成功事例が出始めてくと職員の意識に少しずつ変化が見られるようになってきました。そうすると、歩行だけではなく、次はあれをやってもらおう。これが出来るんじゃないか? と思うようになってきました。

取り組み中の経緯



課題

介護職員の身体的負担の大きさ・トイレ介助の時間拡大

利用者のトイレ介助には職員が2人で全介助にて対応する方がほとんどであり、介護職員の身体的負担(特に腰)はかなり大きいのが現実です。また、トイレ介助に掛かる時間は長くなり、他の業務を縮小せざるを得ない状況です。

利用者が拒む時の対応

利用者の中には誘導を拒む方、トイレ介助時に体の痛みを訴える方、また水分提供を拒む方、麻痺や拘縮のある方の歩行練習の難しさ等、個々の利用者に応じての課題があります。

まとめ(介護力向上に取り組んで)

利用者を考える気持ちや優しさがより強くなった

その方の『まだ出来る可能性』を考えるようになった

ご家族との距離が近く感じられるようになった。

他職種との連携の大切さをより実感でき、行えるようになった。



*ご静聴ありがとうございました。

